



河川に囲まれた関宿は、水運の拠点として発展してきたことが知られています。その地理的優位性を示すものとして、「一国を取るにも替え難い」とする北条氏康の言葉があり、関宿は氏康が生きた戦国時代においてすでに重要な水運の拠点であり、政治・軍事の要衝でもありました。本展の副題「無双之名地」もまた、北条氏康が関宿を評した言葉であり、北条氏は関宿を支配下に置くため、様々な策略や軍事行動を展開しました。この北条氏に対抗したのが、関宿城主・^{やなだ}築田氏です。築田氏は、北条氏と対抗するべく、上杉謙信と手を結び、関宿城の守りを固めました。

なぜ北条氏はそれほどまでに関宿の地を求めたのでしょうか。また、築田氏はいかにしてこの地を守り続けることができたのでしょうか。本展では、こうした点に着目しつつ、関宿合戦が単に1つの城をめぐる争いにとどまらず、関東の政治・軍事・流通のあり方にどのような影響を与えたのかについて考えます。

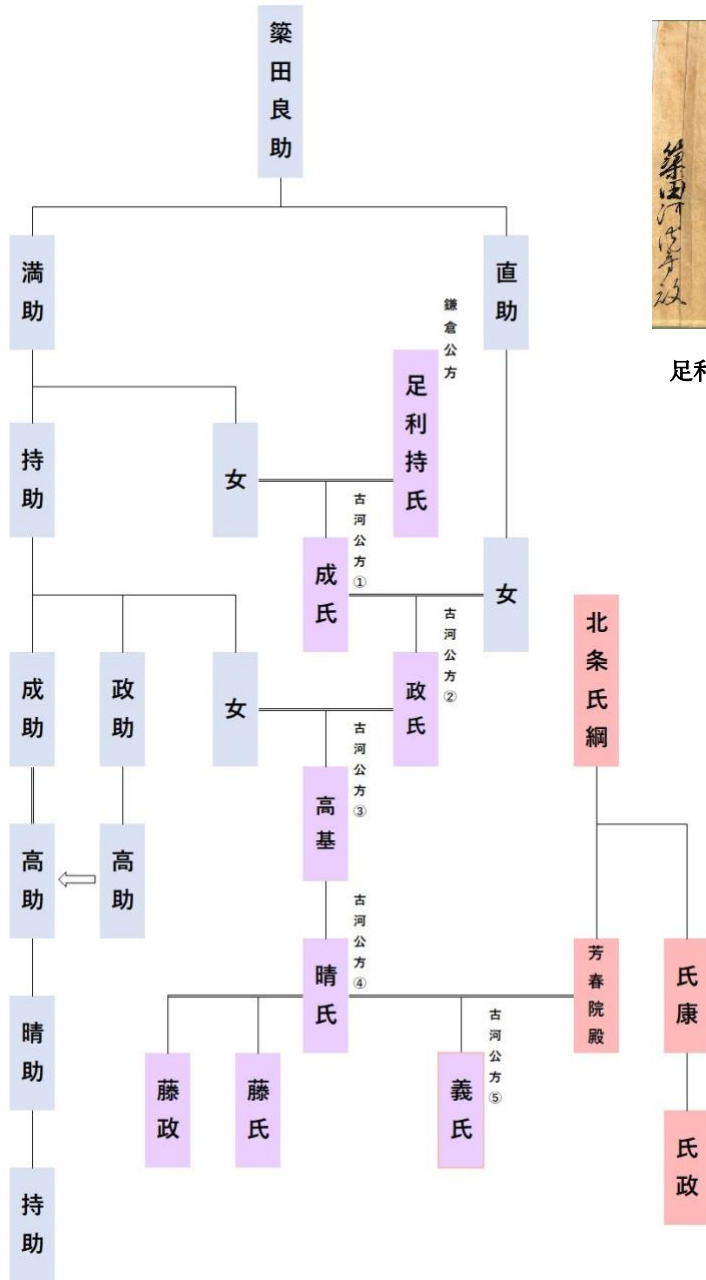
第1章 築田氏と古河公方

関宿城がいつ築城されたかについては明確ではありませんが、この地に初めて城を築いたのは築田氏です。鎌倉時代に足利氏の家臣となった築田氏は、室町時代も東国の将軍たる地位にある鎌倉公方^{かまくらくぼう}の足利氏に仕えました。

室町時代、関東は鎌倉公方を頂点に、その補佐役として^{かんとうかんれい}関東管領が置かれ、両者が一体となって支配を行っていましたが、享徳3年(1454)に鎌倉公方・^{あしかがしげうじ}足利成氏が関東管領・^{うえすぎのりただ}上杉憲忠を殺害し、翌年に古河城(現:茨城県古河市)を拠点とすると、関宿城は古河城を守備する重要な拠点として位置付けられました。

関宿城主であった築田氏は、古河公方の外戚であるとともに側近でもあり、政治的・軍事的に重要な地

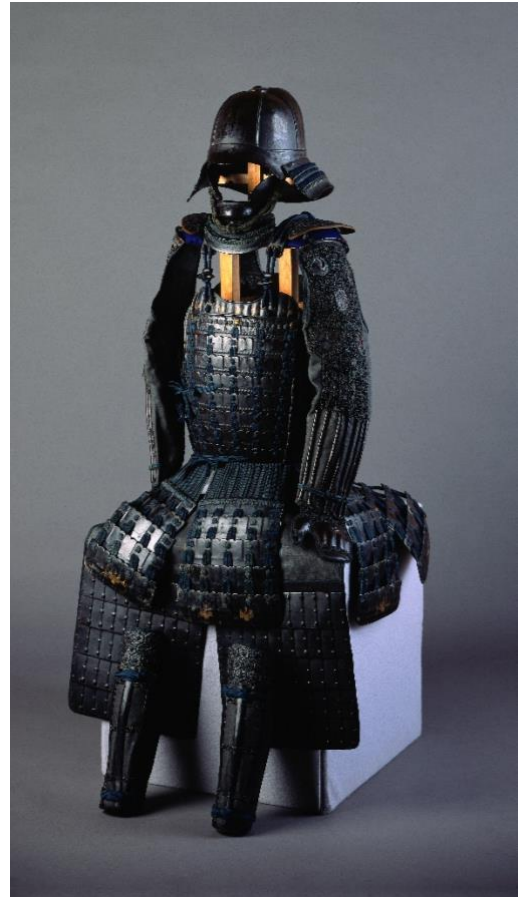
位を占めていました。やがて足利政氏・高基父子の抗争が始まると、築田氏も両派に分かれて対立しますが、高基に近侍した築田高助は一族間の対立を克服し、古河公方家臣団の筆頭的地位を確立していきました。



築田氏関係系図



足利政氏書状 築田克彦氏蔵/当館寄託 築田家文書



標糸威最上胴丸具足（伝足利政氏所用）

埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵

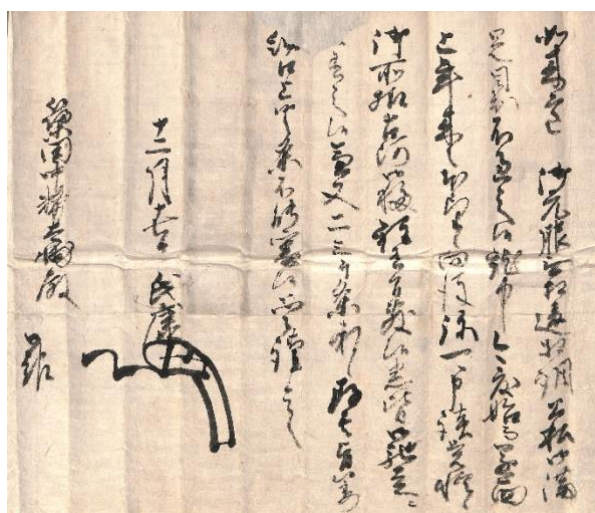
第2章 関宿様の誕生

永禄元年（1558）、関宿城をめぐる一大転機が訪れました。それまで古河公方家臣・築田氏の城であっ

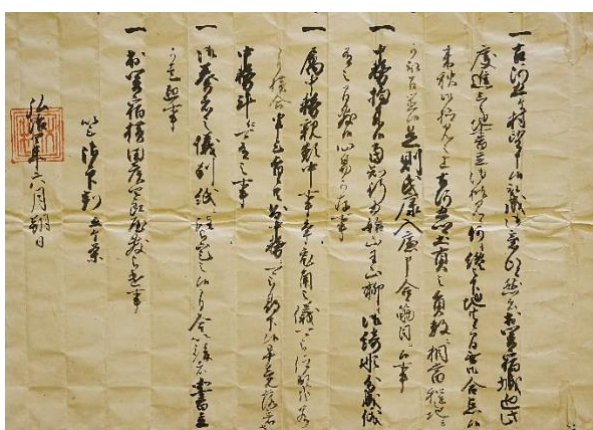
た関宿城へ、4代目古河公方・足利晴氏^{あしかがはるうじ}と北条氏綱^{ほうちょううじつな}の娘・芳春院殿^{ほうしゅんいんでん}の間に生まれた、北条氏を外戚とする古河公方・足利義氏^{あしかがよしうじ}が入城したのです。

義氏はこれ以降「関宿様」と呼称されるようになります。義氏の関宿城への移座^{いざ}は外戚である北条氏^{ほうちょううじ}康^{やす}によって進められ、古河ではなく、関宿に移座させたのは、当時の北条氏の拠点である江戸城や葛西城と関宿城が河川体系で繋がっていたことや、重臣であった築田氏の居城を奪い弱体化させることを目的としたためです。関宿様の元へは移座の祝いとして様々な贈答品が各地から送られ、年始の正月儀礼に際しては、近隣の城主や寺社があいさつに訪れました。

東国の将軍たる地位にある義氏やその家臣は、京都の高度な文化を受容する存在でもあり、和歌や絵画などを残しています。この時期の関宿城は、単なる軍事・交通の要衝であるのみならず、公方の城として政治的にも文化的にも重要な拠点でした。



北条氏康書状 築田克彦氏蔵/当館寄託 築田家文書



足利義氏朱印状 築田克彦氏蔵/当館寄託 築田家文書



一色直朝筆 白鷹図 栃木県立博物館蔵

第3章 東国の物流と関宿

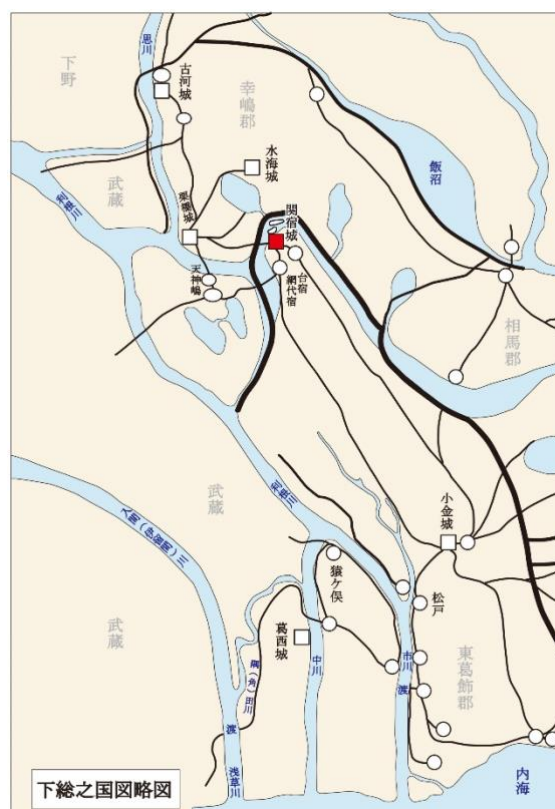
当時の利根川本流は現在の東京湾に流れ出ており、常陸・下総国境には常陸川が流れていました。利根

川は、東京湾から多くの船が遡上する主要な水運ルートで、栗橋城(現：茨城県五霞町)へ海産物が運び込まれたことが記録されています。一方、香取内海(現在の霞ヶ浦)^{かとりのおうちみ}に通じる常陸川は、佐倉(現：千葉県佐倉市)^{かすみがうら}から沼を通じて遡上することで、関宿へ至ることができました。両河川はともに多くの舟が行き交う物流の動脈で、往来する舟への課税は、この地を支配した築田氏の経済基盤を支えていました。

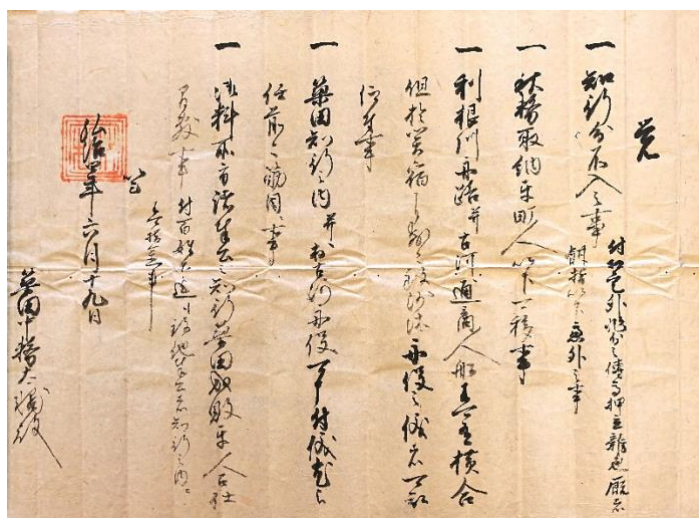
中世の関宿はこの常陸川水系と利根川水系の結節点にあり、両水系に加えて陸上交通も交差する要衝でした。関宿には各地の商人が集まり、連歌会^{れんが}が催されるなど、文化的素養を備えた人々が集まる都市的な場でもありました。このような交通上の特質は、関宿をめぐる争いが単なる城の争奪にとどまらない要因の1つでした。



下総之国図（複製） 当館蔵（原本は船橋西図書館蔵）



下総之国図略図（新井浩文「関宿をめぐる河川と陸上交通」『関東の戦国期領主と流通』岩田書院、2011年より作成）



足利義氏朱印状 築田克彦氏蔵/当館寄託 築田家文書

第4章 上杉謙信の越山—二人の公方と管領—

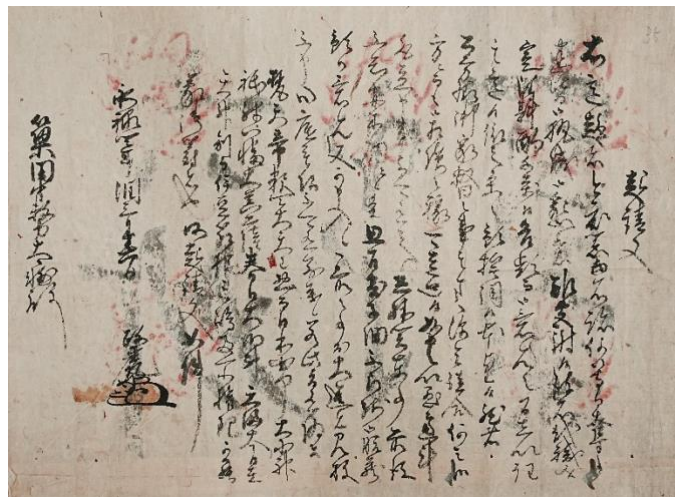
永禄3年(1560)、上杉謙信がかつて北条氏により没落させられた関東管領・上杉憲政^{うえすぎのりまさ}を擁して関東へ出兵しました。これを受けて北条方に従属していた領主たちは次々と上杉方へ転じ、上杉謙信は北条氏の本拠地・小田原城(現：神奈川県小田原市)に迫りました。関宿城も上杉方から攻撃を受け、足利義氏は籠城して抗戦するも、小金城^{こがねじょう}(現：千葉県松戸市)、次いで佐貫城^{さぬきじょう}(現：千葉県富津市)へと移座していきました。

義氏移座後の関宿城は、再び築田氏の手の中となり、以後築田氏は上杉方として活動することとなりました。謙信は築田氏に公方の家督に関することや関東の情勢について意見を求める等、重く用いました。

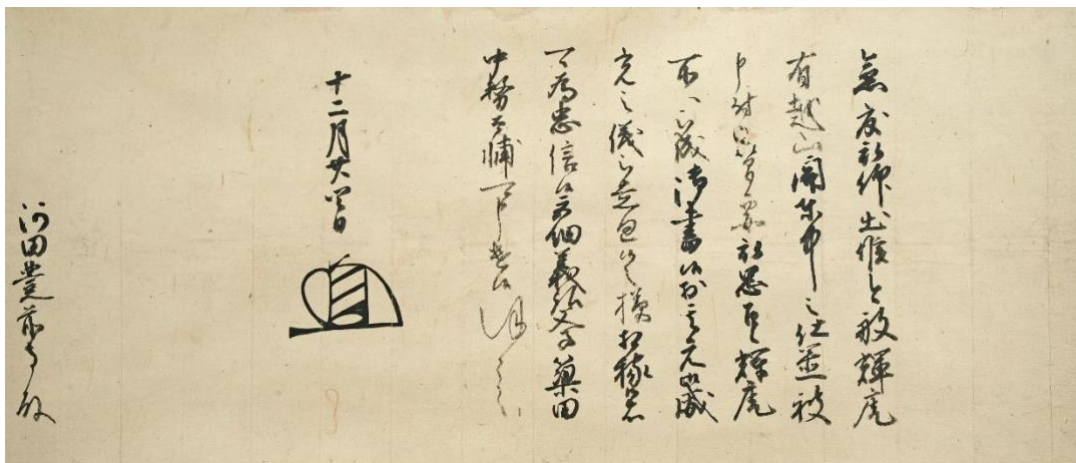
謙信は新たな公方として義氏の異母兄・藤氏^{ふじうじ}を擁立し、築田氏をその後見とし、以降関東には足利義氏—北条氏康、足利藤氏—上杉謙信という2人の公方・管領が並び立ちました。北条氏の攻勢が強まると、藤氏は弟・藤政^{ふじまさ}とともに安房国の里見氏を頼って移座しましたが、築田氏を媒介して各領主へ出陣を要請し、古河への帰座を目指しました。築田氏は謙信にとって、公方の権威を媒介する存在で、関宿城は上杉氏が南関東に影響力を及ぼすための重要な拠点でもありました。



堆朱花鳥彫丸盆 (伝上杉謙信所用)
佐久市教育委員会蔵



上杉謙信起請文 築田克彦氏蔵/山梨県立博物館寄託
築田家文書



足利藤氏書状 長岡市立科学博物館蔵 河田文書

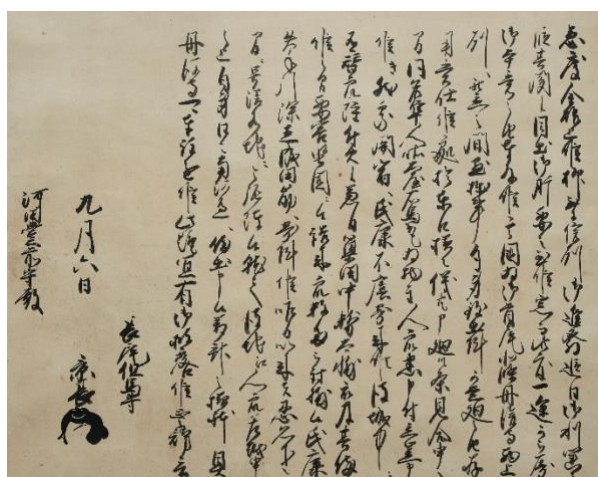
第5章 北条氏との戦い—関宿合戦—

〈第1次関宿合戦〉

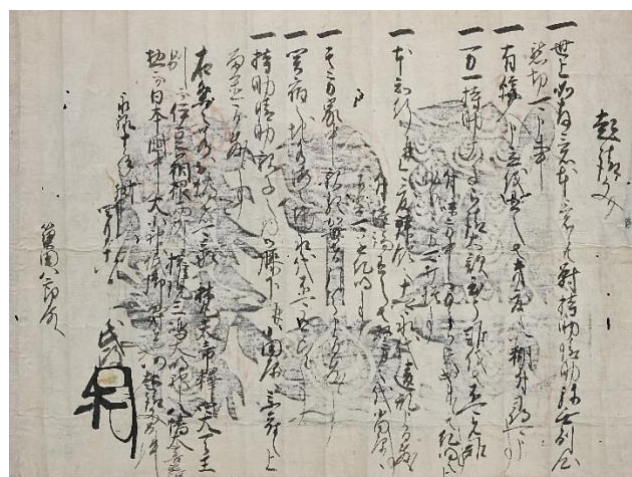
関宿城を巡る合戦については、築田氏が関宿城を奪還した永禄5年(1562)以降、断続的に行われていますが、大規模な戦闘は永禄7年(1564)に行われました。同年9月、北条氏康の軍勢が関宿城を攻撃し、城下への放火が行われましたが、築田氏は堅牢に城を守り、これを撃退しています。

永禄8年3月にも岩付城主・太田氏資^{おおとうじすけ}を先陣に北条氏康の軍勢が野田方面から攻撃しましたが、築田氏はこれを城下へ引き入れて逆襲し退けました。この年、北条氏は5月中旬にも関宿城を攻撃していますが、築田氏がこれを退けています。

第1次関宿合戦ではいずれの戦闘も築田氏が巧みな防御戦により北条氏を退けました。



長尾景長書状 長岡市立科学博物館蔵 河田文書



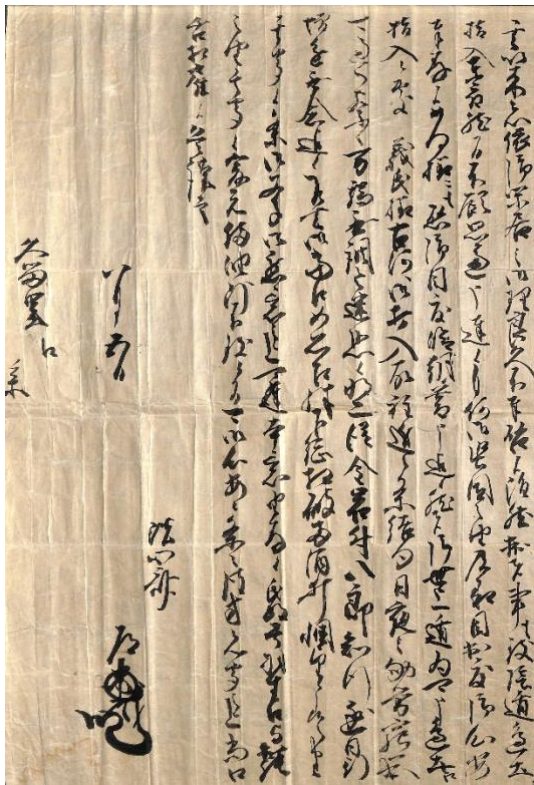
北条氏政起請文 築田克彦氏蔵/当館寄託 築田家文書

〈第2次関宿合戦〉

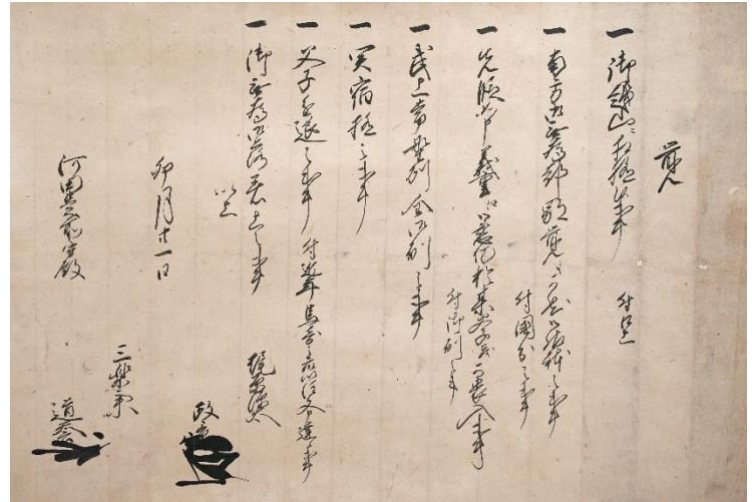
第1次関宿合戦後に北条氏へ従属した築田氏でしたが、従属の条件が履行されないと、再び上杉方へ転じました。

永禄11年(1568)8月、北条氏は再び関宿城の攻撃を開始します。北条氏は栗橋城^{ほしはし}へ北条氏照^{ほうじょうてい}を城主として入城させ、氏照は関宿城近郊に城攻めのための砦を築き、関宿城を攻め立てました。特に山王山^{さんのうやま}(現：茨城県五霞町)に築かれた山王山砦は、関宿城の至近距離にあり、築田氏は危機的な状況に追い込まれました。

しかし、武田信玄^{たけだしんげん}による駿河への侵攻が、この局面を大きく動かします。北条氏は今川・武田氏と同盟関係にありましたが、この駿河侵攻により北条氏は武田氏と対立し、周囲を敵に囲まれることとなりました。この状況を打開すべく、北条氏康は上杉謙信との同盟を模索し、北条・上杉間の同盟^{まつそうどうめい}(越相同盟)が成立することとなりました。この同盟の条件の一つとして、築田氏との合戦の停止及び攻撃のために築いた砦の破壊が上杉氏から提示され、築田氏は危機を脱することができました。



築田晴助書状 築田克彦氏蔵/当館寄託 築田家文書



梶原政景・三楽斎道普連書状 長岡市立科学博物館蔵 河田文書

〈第3次関宿合戦〉

元亀2年(1571)、北条氏康が死去すると、跡を継いだ北条氏政は再び甲斐の武田氏と同盟を結び上杉氏と対立する道を選びます。

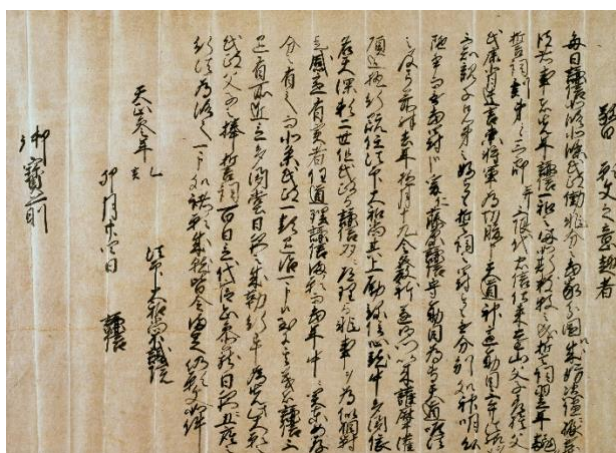
築田氏は、佐竹氏・宇都宮氏と連携をして足利藤政の関宿城への移座を図りましたが、天正元年(1573)2月、北条氏はこれを逆心として関宿城への攻撃を開始しました。同年7月には安房国から足利藤政がついに関宿城へ入城しましたが、北条氏の攻撃は激しさを増しました。

謙信は天正2年(1574)3月に関東へ出陣したものの、雪解け水による増水により、利根川を渡ることができずに撤退しました。同年10月には、関宿城救援のために再度出陣し、各地を放火し、11月には沼尻^{ぬまじり}(現：栃木県栃木市)まで進軍しますが、佐竹氏からの加勢を得ることができずに撤退しました。

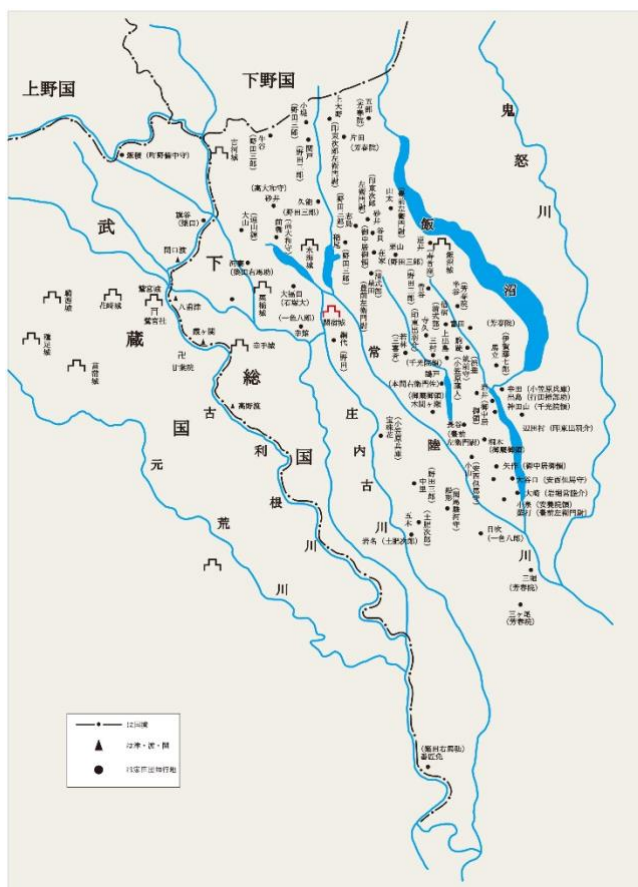
この間、佐竹氏は北条氏との和睦交渉を進めており、閏11月には佐竹氏・宇都宮氏の仲介により、築田氏は関宿城を明け渡すに至りました。築田氏は水海^{みづうみじょう}城での在城を許されますが、足利藤政は切腹を命じられました。上杉氏の関東の拠点^{まやばしじょう}は厩橋城(現：群馬県前橋市)まで後退し、北条氏は北関東へと勢力を拡大していくこととなります。関宿城の開城は、築田氏の関宿支配を終わらせただけでなく、公方家を統合し、上杉氏の南関東への影響力を大きく後退させ、北条氏の北関東への進出を促す転機となるものでした。



北条氏繁書状 並木佑輔氏蔵/千葉県文書館寄託



上杉謙信願文案 米沢市上杉博物館蔵 上杉家文書



古河公方の直轄地とその知行人

市村高男「古河公方の権力基盤と領域支配」『古河市史研究』11号、1986年より作成

第6章 戦国の終焉

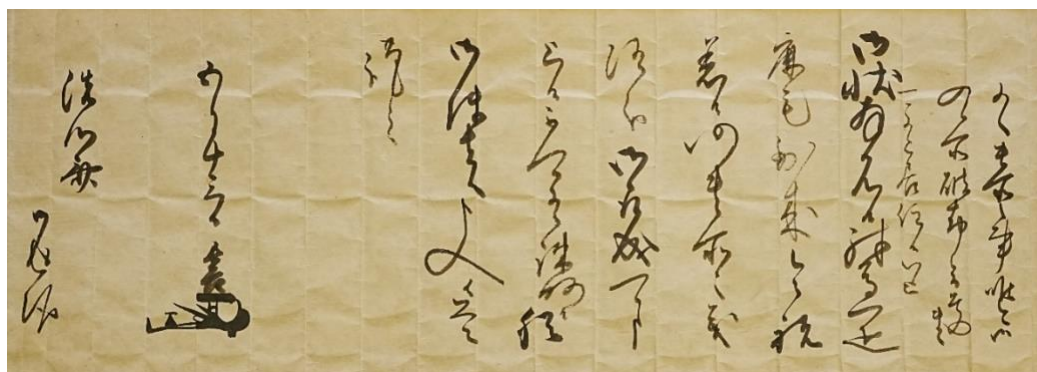
関宿合戦により関宿城を開城した築田氏は水海城へ移り、以降古河公方・足利義氏の忠実な家臣として活動を再開します。関宿城は北条氏政が直接管轄する城となり、城や城下町の整備が行われました。

天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原征伐が行われると、北条方の城は次々と攻略されました。水海城に移っていた築田氏は豊臣方へ与し、水海城を破壊して反抗の意思がないことを示しています。

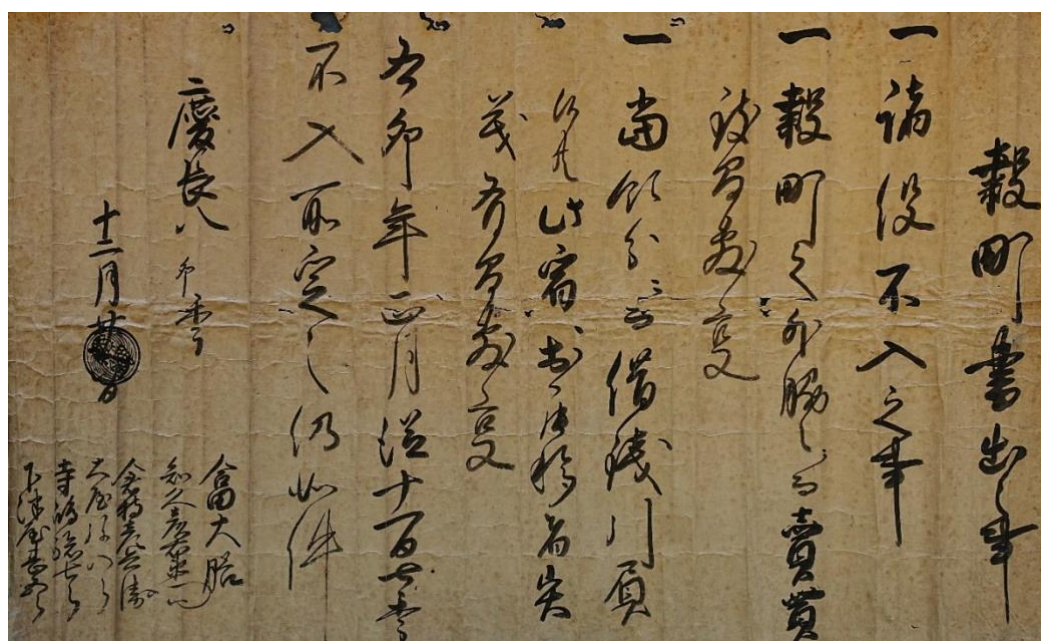
徳川家康が関東に入部すると、異父弟・松平康元^{まつだいらやすもと}が関宿藩を興し、新たな藩主のもと、関宿城下への町人の集住が促進され、軍事拠点としての城郭から、政治的・経済的中心地としての城郭へと整備されていきました。

築田氏は徳川家に仕え、江戸時代は旗本として存続することとなりました。古河公方・足利義氏は、天正10年(1582)に没しましたが、その末裔は、喜連川藩^{きつれがわ}(現：栃木県さくら市)の藩主として江戸時代を過

ごしています。



浅野長吉書状 築田克彦氏蔵/当館寄託 築田家文書



松平忠良黒印状 會田睦子氏蔵/当館寄託 會田家文書